

吉野川可動堰建設事業と住民投票

武田 真一郎

創立二五周年を記念しまして、この一〇月および十一月に連続の講演会とシンポジウムを「分権型社会における自治体と住民」と題しまして行います。今日はその第一回目にもあたります。地方分権と住民投票制度というテーマで、愛知大学法学部の助教授であります武田真一郎先生にお話をさせていただくことになりました。武田先生は、専門は行政法ですが、特に住民投票の法制化というテーマに関しまして精力的にご研究をされています。具体的な事例も含めて、今日お話をいただきたいと思います。それでは早速ですが、武田先生をご紹介します。

ただ今ご紹介をいただきました愛知大学の武田でございます。現在、名古屋の愛知大学におりますが、私は本籍が横浜市港北区日吉本町でして、二〇歳まで横浜に住んでおりました。中学のときに仲の良かった親友が神奈川大学の経済学部を卒業しておりまして、学園祭なんかにはよく邪魔しました。今日久しぶりにお伺いして、随分大学の雰囲気も変わったかと、月日の経つのが早いものだと思っております。

今日は住民投票ということなんですけれども、皆さん、なんか非常に理論的なお話を期待されているかもしれません。私が、私は実は徳島市で行われた吉野川可動堰に関する住民投票の世話人をしておりまして。というのは、愛知大学

に来る前に、私は四国の徳島大学にいたんですね。その頃地元でこういう問題が起きましたので、その世話人をしていたという関係で、実地で関係したと、そういう経験をもっております。従いまして、本日は、私が関わっていた吉野川の住民投票の話を中心にしながら、住民投票制度あるいは地方自治における住民投票の意義について考える契機にさせていただければと思っております。

それではまず徳島の話から始めたいと思うんですが、皆さんのお手元に三枚資料が届いているかと思いますが、その中に文字ばかり書いてあるものと、図表があるもの（後掲）が二枚あるかと思えます。この徳島市で住民投票が行われた、その対象となったのは吉野川可動堰建設事業、あるいは吉野川第十堰建設事業と言われている公共事業、これが対象になるんですね。この吉野川第十堰建設事業というのが何かということからお話したいと思うんですが、これがこの文字ばかりのプリントの一番に書いてありますけれども、実はすでに吉野川には堰があるんですね。吉野川第十堰という堰があります。これは江戸時代に造られたんですね。宝暦二年、一七五二年に造られております。従いまして、去年でちょうど完成してから二五〇年経ったわけですね。その堰はどこにあるかといいますと、この地図の一番をご覧下さい。この真ん中に吉野川が流れているんですが、右のほう、東ですが、東側が河口ですね。ここからずっとこの川をさかのぼりまして、かなり西のほうに行きますと、第十の堰というのが書いてあるかと思えます。ここはちょうど河口から一四・五キロの地点なんですけれども、ここに実はすでに堰があるんですね。先ほど申し上げましたけれども、二五〇年前に造られた堰があるんですね。ここに何で堰があるかっていう事なんです。実は昔の吉野川というのは今よりもっと北を流れていたんですね。この地図を見ていただきますと、今の吉野川本流の上に旧吉野川と書いてありますが、昔の吉野川はこっちを流れていたんですね。こう流れていて、少しかう蛇行して海のほうに流れていく、こんな川だったんですね。ところが、その後、蜂須賀の殿様が徳島に城下町を

開いたんですね。その城下町がちょうど今の徳島市のあたりなんですけれども、ここに新しく町を作ったんですね。そうするとここに町ができましたから、城下に水を引く必要が生じたんですね。吉野川はずっとこっちのほうに流れていたんですけども、こっちに別宮川という小さい川が流れていたんですね。ところがここに城下ができましたから、水を引く必要が生じて、吉野川の水がですね、この別宮川に流れるように、この辺を開削したんですね。ここを広げる工事をしましたが、こっちの別宮川のほうが海に向かって一直線に流れていますから、もうほとんどの水がこっちを流れるようになってしまったんですね。この吉野川が今あるような非常に大きな川になってしまったわけです。四国三郎吉野川と言われていますが、河口の付近は川幅が一キロメートル以上ある非常に大きな川ですね。大半の水がこっちに流れるようになってしまったので、急に吉野川の沿岸の人達が困ったわけですね、水が減ってしまつてね。農業用水も減つてしまいますし、あるいは飲料水なんかも減つてしまうわけですね。それで旧吉野川流域の農民の人たちが中心になって、領主に願い出て、ここに堰を造りたいと、ここをこう少しせき止めてやれば、前のようにたくさんのお水が旧吉野川の方に流れていくわけですね。で、領主に願い出て、ここに堰を造ったんですね。これが今ある吉野川第十堰です。この第十というのは、吉野川にはたくさん堰があつて十番目の堰だと私も思つてたんですが、そうではありません。この辺は昔、第十村というところだったんですね。それで第十堰という名前がついています。これは江戸時代に造ったわけですから、石でできてるんですね。石を積んでできた堰です。この辺は阿波の青石といいます。今でも庭石なんかに使う緑色の非常に綺麗な石がたくさん採れるんですね、徳島県ではね。その阿波の青石を使つて組んだ堰なんですね。まあ今は、コンクリートで大半は覆われてしまつてるんですけども、だいたい今から三〇年ぐらい前までは、昔のままの形が残っていたそうです。その頃は大変綺麗な構造物だったと地元の人はずっといます。緑色の石がずっと積んであるわけですから、大変綺麗な堰だったことは想像がつくかと思いますが。今でも

ですね、この第十堰というのは非常におもしろい堰で、水の少ないときは上を歩けるんですね。向こう側に行けちゃうんですね。一年のうち半分ぐらいは歩けます。歩いてみますと、こんな大きな川で歩いて向こう岸に行ける川というのとは違うと思うんですが、今でも歩いてみると、ところどころに、コンクリートが剥がれているところがあったて、そういうところに昔のままに石積の跡が残っているんですね。そういうのをちょっと見ると、これは随分綺麗な堰だったんだろうなという想像がつくんですね。で、この堰ができてから二五〇年ほど経って、吉野川の水を旧吉野川のように分流するという役割を果たしているということです。

ところがですね、国はこの堰を撤去して、長良川と同じような可動堰を造る、そういう計画を立てているんですね。河口に向かって一・五キロ下流ですね、河口から一三キロの地点、一番の地図を見ていただきますと、可動堰建設予定地と書いてありますが、ここに長良川と同じような、コンクリートでできた、ゲートが上がったり下がったりするようなタイプの堰を造る、そういう計画があるんですね。それがこの住民投票の対象となった可動堰建設事業ということなんです。

それでは、何で、こういう堰を造んなきゃいけないんでしょうか。江戸時代からずっと第十堰があって、現に今でも機能を果たしているんです。これではだめだって言うんです。長良川のような可動堰にしないといけない。その理由はですね、このプリントの二番に書いてありますが、三つあるんです。堰上げ、老朽化と書いてありますが、この一番上の堰上げというのが、一番大きい理由なんですね。堰上げていうのは何かと言いますと、今の第十堰は江戸時代に造った石を積んだ堰ですので、これは確かにその川の水の流れを妨げるというんですね。ここに川が流れていて、そこにこう堰があるわけですから、当然この堰によってこの上流の水位が上昇する、こういう現象が起こるわけです。これを堰上げて言うんですね。堰によって、水位が吊り上げられる、そういう現象のことを堰上げて言うんです。

ね。建設省が言うには、旧建設省ですけども、今は国土交通省ですが、一五〇年に一度の大雨が来ると、危険水位を四二センチ超えてしまう、従って危ない、というのがこの堰上げということなんです。治水上、危険があるということですね。しかしですね、これが大切な根拠なんですけれども、いろいろ調べてみると、この主張では様々な疑問があるということがわかってきました。

まずこの図表の五番を見ていただきたいんですけども、この堰上げが通って一番危険なのは、この堰の上流一・五キロ、河口から一六キロの地点だって言われてるんですね。これはこの河口から一六キロの地点の断面図なんですけれども、この計画高水位というのが危険水位なんです。建設省の計算によると、一五〇年に一度の大雨、これは吉野川で想定されている危険水位なんですけれども、この水位を一五〇年に一度の雨が降ると、四二センチ超えてしまふってことなんです。そうすると、この図のようになりますが、仮に四二センチ本當に水位が上がってしまった、まだ堤防には右岸の側で二・五四メートル、左岸の側で一・九七メートル余裕があるんですね。この付近は危険水位プラス二メートルで堤防を設計するそうですから、左岸のほうをね、あと三〇センチだけかさ上げすれば大丈夫なはずなんです。しかし、それではだめだと言うんです。それではできない。従って可動堰を造って、洪水の時にスムーズに水を流さなければいけないと言われているんです。

この一五〇年に一度の雨が降ると四二センチ水位が上がるということなんです。実はこの計算そのものについて非常に大きな疑問が生じています。というのはですね、これは建設省が水位計算をしているわけなんです。じゃ一体その水位計算をどういうふうにやったのか。これを市民グループが聞きに行ったんですけど、なかなか教えてくれないんですね。計算式はコンピュータの中に入っていて出せないとかね、そういうことを言ってなかなか教えてくれないんです。ところがある日、しぶしぶついに教えてくれたんですね。何度もしつこく行きましたら。で、その

計算式を聞いてきて、専門家と一緒に検討してみたいです。そうすると非常に奇妙なことに気がついたんです。それはこの四番のグラフを見ていただきたいんですが、昭和四九年に吉野川で大雨があったことがあります。そのときに水位がどこまで来たかということなんですが、これは大雨が降ると堤防に木がひっかかり、ゴミがひっかかり、どこまで来たかというのは、跡が残るんですね。しかも何箇所かでは実際に観測してますから、ここまで水が来たことがわかるわけです。それを示しているのがこの四番のグラフなんですけれども、この四角い点、これが実際にここまで水が来たという高さなんです。このときに降った雨の量、吉野川に流れた水の量は分かっているわけです。過去の洪水ですからね。その水量を建設省が使っている計算式に入れてみるとどうなるか、それを示しているのが、この四番の一番上の実線なんです。建設省の式による計算結果。これを見ていただくと分かんと思うんですが、実際の洪水痕跡をかなり超えてしまっているんです。つまりこの建設省の計算式を使うと、水位が過大になってしまふんじゃないか、そういう疑いがでてきたんですね。もし計算式が正しければ、この四角い点と一致しないといけないわけですよ。そのことに市民団体が気がついたんですね。

じゃあ一体建設省はどういう計算をしているんだろうか、そのことをさらに詳しく調べてみたんです。第十堰というのはどういう形をしているかといいますと、この二番の図を見ていただきたいんですが、この川に対して斜めに造られてるんです。斜め堰なんです。これは昔の人の知恵が現れてるんですけども、この川に対して第十堰のように斜めに造ると、堰の長さが長くなるわけですね。長くなると、この水がこの上を分散して流れていくんです。従って上流の水位が上がりにくくなる。しかも堰に当たる水の力も分散されますから、堰自体も洪水に対して強くなる、洪水に流されにくくなるんですね。そういうふうに考えて昔の人がわざと斜めに造っているんですね。これは一つのすごい知恵なんですね。しかしですね、こういう斜めの堰があると、これは今の水理学でも正しい堰上げ計算ができな

いんですね。今の水理学をもつてしても、川に対して直角に設けられている堰については、その上流の水位計算が正しくできる。しかしそういうふうな斜めにある堰についてはね、きちんと計算ができないんですね。それでこういう場合どうやって計算するかといいますと、斜め堰の場合は、これは計算上は直角の堰がある、そういうふうな仮定して計算するしかないんですね。そうするしかないんですね。計算上の直角の堰があると仮定する、で、計算するときには、この堰の長さとは幅ですね、これを適切な値にすることによって計算する、これしかないですね。斜めのままだと計算できない、従って直角の堰があると仮定する。で、計算結果が正しくなるように、その仮定した直角の堰の高さと長さを適切な値にする。これが非常に計算上、重要なポイントになってくるんです。じゃあ、建設省は計算するときに、いったいこの計算上の、架空の堰、これをどれぐらいの値で計算したのか、それを調べてみたのが、この八番の図なんですね。これを見ていただきますと、これはこの第十堰の地点で、川の上流のほうを見た図になるんですが、建設省は、堰の高さが海拔で五・八七メートルのところにあるという計算をしてるんですね。これはそのことを示しています。この付近の第十堰の実際の高さがどれぐらいかというところ、これは一番下の実線なんですね。左側、右岸も海拔ですが、A P 五・五メートルって書いてあります。つまり、この左側の付け根のところは海拔でいうと五・五メートルなんですね。これはかなり長い堰ですから、しかも川は高いところから低いほうへ流れてますから、この河口の側、下流の側は少し下がるんですね。それがこの八番の図の右側の下になります。A P 四・五メートルと書いてあります。こっち側は四・五メートルなんです。これを平均しますと、第十堰の高さっていうのは五・〇メートルなんですね。ちょうど海拔五メートルの高さに堰があるんです。それを建設省はどれぐらいで計算したかというところ、説明したように五・八七メートルで計算してるんです。実際には高さが第十堰の場合は五・〇メートルですね。それを建設省は五・八七メートルで計算していますね。次に長さですけども、実際の第十堰の長さは、二番の図に

書いてあるように、この下堰の方が本体なんですけど、八一五メートルあるんですね。実際には八一五メートルある。建設省は、これをどれぐらいで計算したかというところ、この八番の図の上を見ていただきたいんですが、六一五メートルで計算してますね。もう一回二番の図を見ていただきたいんですが、この付近の実際の川幅は六一五メートルですから、建設省は川幅と同じで計算しているんですね。さっきも言いましたけれども、これを斜めにして、堰を長くすることによって、上を水が分散して流れる。従って、上流の水位が上がりにくいという構造になっているのに、これを直角にして川幅いっぱいにしちゃってるんですね。しかも高さが実際には五・〇メートルしかないのに、五・八七メートルで計算しているんです。もうこれで皆さんお分かりになったと思うんですね。実際よりも短くて、高い堰が川幅いっぱいになり水をせき止めている、そういう前提で建設省が計算していたから、こんなに高い数字になってしまったんです。

これではおかしいと市民団体は考えて、専門家に見てもらって、じゃあどれぐらいで計算したらいいのかということを考えてみたんです。それがこの八番の図の、シンポ投影図と書いてありますが、これは吉野川シンポジウムという市民団体が計算した値ですが、吉野川シンポは高さを五・一メートルで計算しました。実際の数値が五・〇ですから、ちょっと高めに計算したんですね。長さですけれども、吉野川シンポは七一五メートルで計算しました。そうしますと、これはちょうど実際の川幅六一五メートルと、実際の第十堰の長さ八一五メートルのちょうど中間なんです。七一五メートルで計算した。そうすると、どうなるかといいますと、この市民団体の吉野川シンポの計算の仕方です。さっきの昭和四九年の大水のときの水量を入れてみると、この四番のグラフの真ん中の実線になるんです。この一番危険だと言われている、河口から一六キロのところ、ここで実際の痕跡とぴったり一致してるわけなんです。左側の、下流のほうに行くにつれて、堰に近づくにつれて、水の動きが複雑になりますから、ちょっとかなりずれてきちゃっ

てるんですけども、上流のほうですね、安定しているほうを見ると、実際の洪水痕跡とほぼびったり一致している、ということがこの四番のグラフからわかっていただけるかと思います。

みなさんは、どっちの計算方法がより正しいと思われるでしょうか。建設省のやり方と、市民団体のやり方と。これはこの過去の水量を当てはめてみると、おそらく市民団体のほうが正確であろうということがお分かりいただけたかと思います。それでこの建設省の計算式と市民団体の計算式と両方を使って、建設省が言っている一五〇年に一度の大雨、これは吉野川に毎秒一万九千立方メートルの水が流れるという水量になるんですが、それを示しているのが三番のグラフなんです。真ん中の太い実線が計画高水位です。ここまで水位が来ても大丈夫だというように堤防を造っているんですね。建設省のやり方で計算すると、一番上の点線、太い点線がその結果なんです。確かにこのグラフを見ると、危険水位を超えてしまっているんですね。しかし市民団体の計算の仕方では計算してみると、これは下の細い点線がその結果なんです。全ての地点で危険水位を下まわっているんですね。さっきみなさんにも確認しましたけれども、これはおそらく市民団体の計算の仕方が多分正確だと思います。つまりきちんと計算すると、一五〇年に一度の大雨がきても、危険水位を超えることはないんですね。そういう結果がこの三番のグラフから明らかになったということです。ということは、このプリントの二番目に戻りますが、可動堰が必要だという最大の理由、堰上げが起こる、一五〇年に一度の大雨が降ると危険水位を超えてしまう、この根拠は崩れてしまったことになるわけですね。実は建設省も自分で模型実験をやっていたそう、その結果も、超えないという結果が出てたんですね。しかしこの結果はずっと隠されていました。最近になって国の情報公開法ができて、情報公開請求したんですね。実験結果を全部出してくれと。そしてそれを見てたら、建設省の模型実験の結果が出て来て、超えないって書いてあるんですね。今までそれをずっと隠していたということが、後になって明らかになりました。というわけで、この最

大の根拠がね、崩れてしまいつつあるということなんですね。なんか住民投票の話でなくて、水理学の話になって恐縮ですけども、そういうことなんですね。

次に、老朽化と書いてありますが、二五〇年も経ってもう古いっていうんです。直さないと壊れてしまうというんです。満身創痍だって建設省、パンフレットに書いてあるので、じゃ、どこがそんなに満身創痍なのかきちんと説明してくれと聞きますとね、中を見たことがないから分からないというんです。病院に行つて、あなたは満身創痍です、どこが悪いんですか、それは分かりません、手術は必要です、と言っているのと似てますね。どこが悪いから分らないけれども、老朽化している、満身創痍だというんです。

三番目の深掘れというのは、これは斜め堰なんですからけれども、水というのは構造物にぶつかると、直角に流れようとする性質があるんです。従つて、こういう斜めの堰があると、この堰によって水がこちに曲げられて、右岸の側にぶつかるとですね。そうすると、この部分の堤防が抉られてしまう。それを深掘れというふうに言ってるんですが、確かに昭和四〇年代にこの辺が非常に掘れてしまったことがあるんですね。で、それは、この斜め堰だからいけないんだというふうに、建設省は言っているんですが、しかし地元の人のお話を聞きますとね、あの頃高度成長期でこの辺はめちゃくちゃに砂利を取ったっていうんですね。砂利を取ったからここに穴が開いたのが真相だっていうんですね。この第十堰のせいではないと、地元の人と言っているんです。今は現にこの穴にコンクリートブロックを入れて補修してますから、もう深掘れは埋まつてるんです。従つて、この深掘れというのあまり根拠がないということになります。そうしますと、建設省が可動堰が必要だと言っている理由は、全て根拠がないのではないかということが明らかになってきたんですね。

その反面で、もしここに可動堰を造ると、どういうことが起こるか、そのことを考えてみますと、三番に環境への

影響というふうに書きましたが、長良川河口堰、皆さんご存知だと思いますけれども、あそこでどういうことが起こっているか、これは川をせき止めたがために、ヘドロが溜まってしまって、大変なことになってるわけなんです。吉野川でも同じようなことが起こることが予測されるわけです。長良川の河口堰では上流から水が流れてきて、堰のところでいったんせき止められるわけです。その水が下流に流れていくまでに、あそこでどれくらい淀むかということ調べてみますと、これはここに書いてあるように、一四日間なんです。しかし吉野川で可動堰ができると、これもっと大きな堰ですから、どれぐらいここで水が溜まると皆さん思われるでしょうか。これもなかなか教えてくれなかったんですが、ある国会議員が議員の質問権を使って国会で当時の橋本首相に質問してくれたんです。この結果、建設省がしぶしぶデータを出してきたんですが、三〇日なんです。長良川の倍以上です。長良川は一四日間であれだけヘドロが溜まってしまった。しじみの特産だったのが、全滅してしまっただけです。それと同じようなことが吉野川でも起こることが当然予想されるわけです。建設省は、そう言いますとね、長良川と吉野川は違うと言います。長良川はあの辺はもう岐阜とか大垣とか大きな町があつて、もともと水が汚い、そういうと岐阜県の人はずごく怒るんですけど。しかも長良川は流れがすごく緩やかなんです。それに対して吉野川というのは、流域に大きな町がなく、もともと水がきれいだ、しかも吉野川は川の流れが急なんです。だいたい一〇〇〇分の一、一〇〇〇メートル流れると一メートル下がる。これは大きな川としては、かなり急なほうなんです。だからヘドロが溜まらないというふうに建設省は言うんですけれども。しかし富山県に黒部川という川があります。この川は上流から河口まで長さがだいたい六〇キロぐらいで、高低差が二〇〇〇メートルあるんです。この真ん中に出し平ダムというダムができたんですが、黒部川のような清流、急流でもダムを造ったら、ものすごくヘドロが溜まってしまったんです。で、そのヘドロを流したら、富山湾が汚くなって、富山湾の漁業にまで影響が出た。川をせき止めるということは、人の

予測をはるかに超えた大きな負担を川に与えてしまうんですね。従って、吉野川でも可動堰ができると、長良川と同じか、あるいはもっとひどいことが起こるということが予測されるわけです。

さらに今の第十堰というのは、石が積んであるだけです。この七番の図を見ていただきたいんですけど、この右側の図のようにですね、石が積んであるだけです。常に堰の間を水が流れている。透過水があるわけですね。さらに下がもう土ですからね、コンクリートで固めていませんから、伏流水になって堰の下 of 土壌の中も水が流れている。それでこの河口の側、下流の側には、むしろ濾過されているきれいな水がどんどん流れ出ているわけですね。水は貯めているけれども、水が澱まない。そういうフィルターの役割を果していますね。ところがこれをコンクリートの可動堰にしますと、この左側の七番の絵のようになるわけですね。堰のゲートは一つ六〇〇トンぐらいあるそうです。あれを支えるために、だいたい堰の前後三〇〇メートルぐらいを全て下も横もコンクリートで三面張りにしなければいけない。そうすると、どうなるか、今ある透過構造は失われて、そしてこの絵にあるように、上流の側には特にヘドロが溜まって、無酸素状態になってしまうんです。七番の絵、これ野鳥の会から借りてきたんですけど、可動堰の左側で魚がこれひっくり返って酸欠で死んでるんですね。こういうことが実際に起こるわけですね。こういうわけで、三番環境への影響と書きましたが、水質の悪化と生態系の変化によって環境に非常に悪い影響が起こるということが予測されるわけですね。

もう一つ大きな問題が四番の財政への影響です。この可動堰の建設費は一〇四〇億円というふうに言われていますが、徳島県の人口が八〇万人ぐらいですから、県民一人あたり一二万五千円の負担になるんですね。かなりの負担だということと言えるかと思いますが。しかも長良川河口堰で一八〇〇億円かかっていますから、この堰のほうがもっと大きいのですから、実際にはこの倍ぐらいかかるだろうと言われていますね。そうしますと県民一人あたり二五万円って

ことになりますね。果してこれだけの投資をする価値があるのかどうか、考えてみる必要があるかと思えます。年間維持費にしても、現在は石が積んであるだけですから、維持費がゼロなんですね、ほとんどね。それがゲートの維持だけでほしい七億円かかるといわれています。国の事業ですけれども、徳島県の負担は一六パーセントと計算上なるんです。そうすると一六〇億円ですね。一〇四〇億円として一六〇億円の負担。維持費についても四五パーセント国が負担するということになっていますので、年間三億円負担しなければいけないということになります。徳島県というのは、日本でも有数の貧乏県でしてね、その起債制限比率というので、自治体の財政の健全性をみることができるとですが、これが毎年の歳出の中に占める借金返済、負債の返済が実質的にどれくらい占めているかというものを示す値なんです、一二・六パーセントで全国でワースト九だったんですね。九八年の話なんですけどね。その前の年は、ワースト四だったんですね。今は他の県がもっと悪くなっちゃったので、徳島県を追い越しちゃってるので、相対的に順位は上がっているんですが、もともと徳島県は財政的には非常に厳しいということには変わりありません。そこでこれだけの費用を投じる必要があるのかどうか、ということがやはり問題になるかと思えます。

このような国の事業に対して、市民がどういうふうに動いてきたかということが、次の五番のところに順を追って示してあります。まずそもそもこの事業の話が出てきたのがいつごろかということなんですが、これは最初に審議会で議論されてるのが、一九六六年七月なんですね。このときに、促進決議がなされています。この当時はですね、なんで改築しなければいけないかという理由が、塩害の防止と言われたんですね。ここは吉野川の河口に近いですから、海から塩分が上がってくる、川をさかのぼってそれが地下水に滲みて農業に影響がある、だからコンクリートの堰でブロックして、塩害を防がなければいけないというのがね、当時の理由だったんですね。しかし、塩害というのは、可動堰なんかじゃ防げないんですね。あれはもっと広範に土壌の中を浸透していくので、堰を造ったぐらいでは防げ

ないということが、科学的に明らかになったわけですね。そうしたら、塩害というのは理由にならないということで、次に利水になったんですね。せき止めて、水を確保しなければいけない。しかし高度成長期が終って、水需要がなくなるということが明らかになって、利水も理由にならなくなったんです。そうしたら治水になったんですね。さっき説明しましたけれども、洪水が起ると危険だという理由が表に出てきたんです。こういうふうな建設理由がころころ変わるというところにも、非常に大きな問題があることが言えるかと思っています。

八三年に県議会が促進決議をして、九一年に事業着手がなされました。これは工事が始まったということではなくて、本格的な調査が始まったということです。ところがちょうどこの頃にですね、長良川の河口堰が運用を始めて、非常に大きな問題になったんですね。河口堰を造ったら、お金もかかるし、環境が非常に悪くなってしまった。長良川河口堰が無駄な公共事業の代名詞のように言われる状況が生じてきたんですね。ちょうどそういう時期でしたから、徳島の市民は、徳島でも長良川と同じような計画があるということを知って、非常にみんなびっくりしたわけです。それでこの問題を考えるために、この吉野川シンポジウムというシンポジウムが開かれたんです。この吉野川の河口堰の問題をみんなで考えようということで、吉野川の自然と第十堰の改築を考える集会が開かれたんですね。これは一回だけやって終わりにしようと思っていたんですが、これを開いたら非常に反響が大きくて、とても止められなくなりました。現に今に至るまで続いている、私も会員になっていきますけれども、これが市民の動きの最初なんですね。

九五年になりますと、建設省は全国のダムや堰の事業の必要性をもう一度審議する必要があるということで、全国に一一の審議会を作ったんです。長良川の河口堰を見て、公共事業に対する風当たりが強くなってきたので、建設省はこういう審議会を作らざるをえなくなったんですね。徳島県には二つできました。一一のうち二つできました。一

つは細川内ダムほそがわうちというもつと山奥のダムなんです、これは完全に中止になりました。もう一つがこの吉野川第十堰建設事業審議委員会というのが設置されたんですね。第十堰の改築が必要かどうかもう一度きちんと考えてみようということ、審議会ができたんです。その目的自体は非常に結構だと思うんですが、しかし審議会委員が一人いました。まず一人がですね、徳島県知事なんです。その後汚職で逮捕されて失脚したんですけども、この当時の徳島県知事は可動堰建設の急先鋒なんです。一番旗を振ってる人なんです。この人がまず任命された。知事が他の委員を任命するんですね。全部で一人委員がいて、一人は知事です。後の一〇人のうち八人は地元じよんの町や市の長と議長ですね。こういう人達は全部可動堰建設の促進決議をしている人たちなんです。つまり推進派ですね。明らかに反対派といわれる人は一人だけだったんですね。徳島新聞の論説員でしたけれども。反対派一人だけ。どっちつかずの人が一人。あとの九人は全部推進派なんです。こういう審議会でも可動堰の必要性を審議したらどういふ結論が出るでしょうかね。もう最初から分かっているわけですね。絶対推進という結論が出ます。実際その通りになりましたけど。そういうインチキな審議会にならないようにということで、市民の側は、ダム堰にみんなの意見を反映させる県民の会というのを結成しました。その後ずっと審議は続いていたんですけども、私もほとんど傍聴しました。ほとんど意見は出なくて、建設省の説明会という気がしましたけども、三年間審議を続けたんですね。九年の七月、審議会の最終意見がいよいよ出るという日を迎えたんですけど、この審議会が議論を進めるにつれて、世論調査をするたびに可動堰に反対だつていう意見が増えていったんですね。審議会では一生懸命必要だ、必要だつて議論しているのに、議論が進むにつれて、世論では反対が増えていったんです。この九八年の六月の時点で、地元の四国放送というテレビ局が調査した結果が、この九番と一〇番のグラフに出ていますけれども、九番のほうが県全体ですね、県全体でみると反対が五三・七パーセント、賛成が二九・四パーセントですから、かなり反対が多いという

ことが言えるかと思います。この世論調査で非常におもしろいのは、堰の近くほど反対が多いんですね。本当はおかしいですね。可動堰ができれば洪水が来ないっていうわけでしょう。つまり可動堰によって守られるはずのところほど反対が多いんですね。右側の図を見てください。これは堰の周辺の二市九町だけで見た図なんです、反対が五七・一パーセントに増えているんですね。洪水から守られるはずのところほど反対が多いという非常に奇妙な結果になったんです。これはどうしてかと言いますと、地元で堰をしょっちゅう見てる人ほど、今の堰が原因で洪水が起こることはないってことを実感しているんですね。特にこの地元では、第十堰のことを「お堰」と呼ぶんです。「お」を付けて呼ぶんです。つまり尊敬されてるんですね。昔からこの堰は吉野川の水を旧吉野川のほうに分けて、その田畑を潤して、あるいは飲料水なんかも提供してくれる非常にありがたいものだ、しかもその堰の周辺には色んな魚が来るんですね、で、漁もたくさんできる。しかもその魚を求めて鳥も来るわけですね。すごく自然が豊かなところなんです。だから地元の人には親しみをこめて「お堰」というふうに呼んでるんです。だから地元の人から見ると、あの堰を壊して長良川みたいなものを造るのはとんでもないという意識がむしろ他の地域よりも強いんですね。特にこの第十堰のすぐ河口、右岸の側、徳島市の佐野塚というところがあるんですが、その農家は全戸が反対なんです。一番の地元が全戸が反対している。そういう状況がこの世論調査でも表れていることが言えるかと思います。審議会の結論、これは予想通りの結論が出たんですが、その前日に参議院選挙があったんです。このときには可動堰が大きな争点になったんですが、自民党の現職、県連会長でしたけれどもね、その人が落選して、新人、可動堰に反対という慎重な態度をとっていた、実は反対なんですけれどもね、反対していた新人が当選するという結果が出ています。ところがですね、審議会が予想されたとおり、可動堰計画が妥当であるという結論を出しましたんで、ますます徳島県や建設省は勢いづいて、もう早急に工事を始める、そういう動きになっていったんですね。そういう状況を見て、

徳島の市民は、これはきちんと市民の意見を明らかにしなければいけない、そのためには住民投票をする必要があるだろうということになって、九八年の九月に第十堰住民投票の会というのが結成されました。私もそのときに世話人になってほしいということで、引きずり込まれたわけなんですけれども。それで市民の側は住民投票の実現に向けて動き始めたんですが、ここで最初にしなければいけないことは、住民投票をするためには条例を制定しないといけないんですね。今の日本には住民投票をするための法律がありません。特殊なものはいくつかあるんですけども。この一般的な大きな問題について住民投票するための手続きを決めた法律がありません。従って、住民投票をしようと思ったら、その自治体で条例を作るしかないですね。しかし徳島では、地元の議会はほとんど可動堰推進を決議していますから、そういう議会が住民投票条例を制定してくれるでしょうか。これは制定するはずですよ。住民投票したら、反対の結果が多くなる可能性がかなり高いですから。そうすると議会は条例を制定してくれない。そうするとどうするかといいますと、地方自治法七四条に条例制定改廃の直接請求という制度があるんです。この制度は自治体の有権者の五〇分の一以上の署名を添えて、市の場合は市長に請求するんですね。そうすると、その市長が意見をつけて議会に付議する。議会が可決すると、条例が制定される、そういう制度があるんです。住民の側から制定を求めることができる。そういう直接請求っていう制度があるんです。これを使うしかないんです。まずはこの直接請求の署名集めをしようということになったんです。今言ったように五〇分の一の署名があればいいんですね。徳島市の有権者当時二〇万人強でしたから、四〇〇〇人強の署名を集めるわけですけども、今言ったように、最終的には議会が可決しないと成立しないんです。そうすると議会が否決したら、アウトですね。じゃ、議会で可決される、議会に可決させるにはどうしたらいいかと考えてみると、これはもっとたくさんさんの署名を集めるしかないんですね。五〇分の一集めればいいと書いてあるけれども、これじゃとても足りない。それで住民投票の会としては、三分の一の

署名を集めようという目標を立てたんです。なぜ三分の一かというと、三分の一の署名があると、市長とか議員をリコールできるんです。それだけ集まればびっくりしてそう無碍にはしないだろう、まあ、そういうふう考えたんですね。有権者の三分の一の署名集めを目的にして、この署名の収集活動を開始しました。最低五〇分の一あればいいわけですから、四〇〇〇人になるかと思うんですけれども、この署名集めをする人のことを署名収集の受任者というんです。署名集め人のことを受任者というんですね。受任者も有権者じゃなきゃできないんです。しかもちゃんと選管に登録しないといけないんですね。これが結構面倒くさいんですね。ところがですね、受任者を集めたら、署名をはじめめる前に五〇〇〇人集まっちゃたんですね。最低必要署名数四〇〇〇。署名集め人だけで、もう五〇〇〇人集まっちゃったんです。実際に署名収集を一ヶ月間ですけど、一月二日から二月二日まで、九八年でしたけどもね、祭日のある関係で一日延びたんですけれども、署名の収集を開始しました。熱心に署名してくれた人には、あなたも受任者になってくださいって言って、受任者セットという、すぐ受任者になれる封筒セットを用意しておいて、これをどんどん配って、最終的には受任者だけで九〇〇〇人になったんです。

署名集めを始めると、市民の関心は非常に高く、最初のうちはもうどんどん爆発的に署名は伸びたんです。ところが、一週間ぐらいすると、ぱたっと止まったんです。これはどうしてかっていうと、徳島みたいなちっちゃい町だと昼間同じとこで、署名集めやってると、歩いている人が、同じ人なんですね、みんなね。もう署名しましたという人ばかりになっちゃったんです。これはもう困りましたね。とてもこれじゃあ三分の一いきそうもない。それでみんな考えて、こうなったら全戸ローラー作戦をやるうという。市内の世帯を全部回ろうと決めたんですね。何しろ受任者は九〇〇〇人いますから、それやろうと思えばできるんです。それで参謀の人が住宅地図をコピーして壁に貼って、それぞれ分担を決めて、自分の担当のところは全部回るって、目標を立てたんですね。それを本当に実施したら、

また非常にたくさん署名が伸び始めたんです。全戸回って、僕も随分行きましたけれども、署名集めしていたら、非常に盛り上がって、色んなエピソードがあったんですけどもね。ある家に、署名集め人が行ったら、もう夜で暗いの、電気がついてないというんですよ。しかし何か人の気配はする。だから変だなと思って、その家へ行ってみたら、そこは目の見えないお婆さんが一人で暮らしてたんですね。そのお婆さんが言うには、自分は子供のころ第十堰のそばに住んでいて、なんかあれがなくなってヘドロが溜まるようなものができるって聞いて、ぜひ署名したいと思っていた。でも、目が見えないから、どこに行ってもいいかわからないし、すごく困っていたと。そしたら自分の家まで来てくれて、非常に嬉しいと言って、喜んで署名してくれたという話もあるんですね。

あるいは、あるときに住民投票の会の事務所にちょうど僕が出ていたんですけども、警察から電話がかかってきたんです。そりゃびっくりしましてね。ついに我々の運動も弾圧されるようになったかってね、すごいこう構えたんです。警官が言うには、今、逮捕拘留している被疑者が署名簿を持ってますと言うんです。これは大変重要なものなので、お返ししたいと思いますので、取りに来てください、とわざわざ電話してきてくれたんですね。なんかその署名の強要とか、あるいは人の家に立ち入ったりして、それで捕まったのかと思って、署名収集に関連して逮捕されたんですかって聞いたたら、いや何も関係がありませんというんです。後で聞いたたら、その被疑者というのは、夫婦で、結婚詐欺をやっている人、詐欺師だったんです。詐欺師が受任者になって署名集めてですね、で、それを捕まえた警察がちゃんと名簿を返してくれる。これは、いかにこの署名運動が、徳島市民に浸透していたかということを、よく物語る話だと僕は思っているんです。この話はおもしろいからあちこちでしていたら、ロンドンのフィナンシャルタイムズっていう新聞にも出たそうです。日本の社会も変わりつつあるということだね。そんなこともありました。

それで署名が非常にたくさん集まって、最終的には、これは選挙管理委員会が書面の有効性をチェックするんです

が、有効署名数一〇万一五三五、これは徳島市の有権者の四九パーセントなんです。町に行く人の二人に一人が署名してくれたということです。五〇分の一をはるかに超えています。目標の三分の一も大幅に超えたということです。よね。みかん箱三三箱になりましたけれども、この署名簿を添えて市長に請求したんです。ところが九九年の二月、臨時市議会が開かれたんですけれども、徳島市議会是有権者の半分が求めた条例制定請求を否決したんですね。県庁所在地クラスの大きな都市で、これだけ署名が集まったということは前例がないんですが、市議会はその条例案を否決しました。皆さんは小学校以来、議会というのは住民の代表だっていうふうに習ってきたと思いますが、これは必ずしも本当ではないですね。住民の半分が求めた条例案を否決してしまう。これが議会の姿ということですね。こういう実情があるから、実は住民投票が必要なんです。最近になって全国各地で住民投票が盛んに行われるようになりましたが、その一番大きな原因は、ここに見られるような、本来住民の代表であるはずの議会が住民を代表していない、間接民主制が機能不全に陥っている、そういう実態があるということが、実は住民投票が求められている、住民投票のような直接民主制が求められている最大の理由なんです。そのことをこの徳島市議会が非常によく表しているかと思っています。

それで否決されちゃいましたのでね、市民の中では非常に怒りが高まりました。で、どうするかっていうと、これはもう議会の構成を変えるしかないんです。二ヶ月後には徳島市議会選挙が迫っていました。そこで住民投票の会は、じゃ今度はまともな議員を増やして、それで住民投票条例を請求しようということ、今度は選挙に挑んだんです。素人集団ですからね、なかなか大変でしたけれども。今度は次の市議会選挙で議会の構成を変えることを目的にして活動を始めました。住民投票の会が、そのまま選挙団体になってしまうことは問題があります。住民投票を支持してくれた人が、我々の支持する候補者を支持するとは限らないですから、これは区別する必要があるということで、別

の組織を作ったんですね。それがこの住民投票を実現する市民ネットワークですね。選挙運動なんかも、この署名簿を使うとすごく楽だったんですけど、それはやっぱり良くないということで、全員にハガキ出したんです。選挙にも協力してくれますかと聞いて、大半の人は協力してくれるって、八割ぐらい返ってきたんです。この署名簿は全部破棄しましたね、その時にね。それで選挙戦を戦ったんですが、われわれから五人候補者を出したんです。既存の政党の中からも住民投票に賛成する人が増えてきましたので、うまくいけば議会の構成が逆転するっていうところまで、もちこんだんですね。僕も随分応援演説に行きましたけれども、市民はみんな怒ってますから、応援演説をやつてるとすごいみんなよく聞いてくれるんですね。車を運転してる人なんかが、乗り出して、わあって手振ってくれたりして、危ないんじゃないかと思つてはらはらしたりもしましたけれども。投票日を迎えると、ここに書いてありますが、九九年四月二五日に市議会選挙がありました、改選前は住民投票賛成が一六、反対が二三だったんですけども、賛成が二二、反対が一八、逆転することに成功したんですね。

これで新しい市議会ですんなり住民投票条例が可決されるとみんな期待したんですが、ところが議会が始つてみると、ある政党、この中で支持者がいるとちょっと申し訳ないんですが、公明党が、ごねだしたんですね。選挙のときには住民投票賛成と言ったのに、選挙が終わったら突然時期尚早と言い出したんです。というのは、当時もう国の政治のレベルで公明党が与党になったんです。で、連立している自民党が可動堰造りたくてしようがない、従つて与党の公明党としては可動堰に反対しにくいっていうね、そういう事情があったんです。独自の世論調査をして、まだ可動堰が必要かどうかかわからないって言っている人が四〇パーセントもいるから、今住民投票をすることは適当でないと、急に寝返っちゃったんですね。その独自の世論調査というのが、町を歩いている小学生にまで可動堰が必要と思ひますかって聞いて、分かりませんと言うでしょ、で、わからないと言つた人が多いって言つてね。そういう調査なん

だそうですけどもね。公明党が賛成しない。で、いろいろ交渉するうちに、公明党がこの市民案はだめだって言うんですね。実はこれ僕が作ったんですけれどもね。この署名簿に載っている条例案は、我ながらよくできてると思うんですが、これじゃだめだって言うんですね。自分たちがもつといい案を作るからと言うんです。こっちの修正案だったら賛成してやると言うんです。ところがその修正案というのがひどいもので、まず投票期日は別条例で決めるっていうんです。だから議会がうんと言わない限り、投票が空手形になっちゃう可能性があるんですね。こっちの案では六ヶ月以内にやるっていうふうに決めてましたから。もう一つは投票率五〇パーセントない場合は開票もしない、そういう要件を突きつけてきたんです。自分達の選挙だって投票率五〇パーセントもいかないのにね、突然五〇パーセントというハードルを突きつけてきて、しかもこんな高い投票率を要件にすると困るのは、推進派が住民投票をボイコットする可能性があるわけです。五〇パーセント取るのは大変ですから、住民投票なんか行くなという運動を始められちゃうと、これはもう投票が成立しなくなる可能性が非常に高いですね。これもおかしい。最後にもう一つ問題があったのは、署名集めの時に戸別訪問をしてすごく効果があげたわけですね。これを畏れて、戸別訪問は禁止、罰則までつけるというんです。そういう罰則規定、戸別訪問を禁止する規定もあつたんです。しかし住民投票というのは、市民が議論して自分が納得したほうに一票を入れる、そういう制度ですからね。本来は戸別訪問をしている議論することが非常に重要なんです。だからこれは住民投票の本来の目的と全然逆なことを決めた、おかしい条例っていうかね。随分批判したんですけれども、だめなんですね。公明党はこういう案を出せば、共産党が怒って反対するだろう。それで投票そのものは、流れてしまうというふうにみてたんですね。ところが住民投票推進派の側は、これひどい条例案だけれども、ないよりはましだと。これが可決されれば、投票の実現に一步近づくと、共産党を説得して、みんなこれでいいって言っちゃったんですね。それでやっと住民投票条例が可決されて、九九年の六月、条例

が成立しました。しかし投票期日は別に決めるっていうんだから、いつ投票が行われるかは全然わからないという状態が続いたんです。ところがですね、それに対して市民の批判も非常に高まって、しかも翌年の春には衆議院選挙があるっていうこともありまして、このままずるずる引きずると、かえって保守派は不利だと、そういうふうに考え出したんです、保守系の議員たちがね。もうさっさとやっちゃおうというふうに、保守系の議員がガンガン言い出して、それで九九年の一二月に施行日を決める条例が可決されて、二〇〇〇年一月二三日、この日に投票が実施されることになりました。

当日は雨の降る寒い日でしたけれども、早くから投票率が高まって、投票率は五五パーセントとなりました。五〇パーセント条項をクリアした。結果は反対が九一パーセント。何しろ推進派は投票ボイコット運動をやってましたからね。推進派の人はあんまり投票に来ないですからね、ますます反対が増えた。それで賛成が八・四パーセント、圧倒的な差で徳島市民が可動堰の建設に反対するという結果が出たんですね。投票の前日なんかはもう非常に盛り上がりましてね、街中に投票に行こうっていう、黄色いポスターを作ったんですけども、それが誰が貼ったかと思うぐらいね、全ての電柱に貼ってあるんです。のぼりがはためていて。駅前では明日は投票に行きましょうって演説してるよね、バスの運転手さんがもうみんな手を振っていつてくれるんですね。それぐらい盛り上がって、投票が成立したというわけです。

現在は可動堰計画は白紙凍結ということになってるんです。その後いろいろな動きがあって、現在凍結です。中止ではないんですね。いつ凍結が解除されて、また事業が進み出すか、わからないという状況なんですけれども、事実上それはなかなか難しいだろうというところには追い込めたということが言えるかと思います。徳島でなんでもんなふうな、住民投票が盛り上がってうまくいったかということですね、私自身も関わってましたから、まとめ

てみますとね、この六番に書いたように、三つの大きなパラドックス、逆説があったと思うんですね。

一つは、反対運動でなかったために、かえって市民の反対運動が高まったということなんです。これはこの運動を始めるときに、可動堰ありきというのもおかしいけれども、初めから可動堰反対というのもおかしいんじゃないか。本当にこの堰が必要なのか、それとも必要じゃないのか、冷静に科学的に考えよう。そんなスタンスでこの運動を始めたんですね。そうすると、反対運動じゃないわけですから、基本的に、何か集会をするときにね、推進派の人も来てくれるんです。来なきゃいけないですね。建設省なんかは必ず集会に来て、反対だっていう意見もあるけれども、なんで推進なのか、なんで可動堰が必要なのか、逆に説明しなきゃいけないんですね。反対運動だと、みんな引いてこなくなっちゃいますけれども、そうじゃないから、来て、説明しなきゃいなくなるわけです。徳島では集会があると、反対派の市民と推進派の行政の側とね、両方一緒に来て同じテーブルについて議論するわけです。これは徳島方式といって非常に注目されましたけれども、賛成派も反対派も同じテーブルについて議論する、そういうスタンスができたんですね。その両方の議論を聞いて、市民はそれはいらんじゃないか、市民の反対している意見のほうが合理的なんじゃないか、多くの人がそう考えて、反対が増えたんです。つまり反対運動じゃなかったことによって輪が広がって、かえって反対意見が固まった。そういう一つの逆説があったと思います。

それから二番目ですけれども、専門家の建設省よりも素人の市民のほうが科学的、客観的だったということです。治水の問題なんか市民には分からないんだから、私たちに任せなさいと建設省は言うわけです。しかしさつき説明したように、市民の側がおかしいってことを発見しちやっただんです。今の市民はそこまでの力を持っていると思います。市民のほうが科学的だったということが、一つのこれも大きな逆説と言えるかと思います。

それから三番目ですけれども、政党色を排除したために、政党以上に市民のパワーを結集できたんですね。これも

署名集めをするときに、まあ、ある革新政党の人は、市民なんかになにができるかと、俺達のノウハウが必要だつてことを言ってるね、自分たちを世話人にしてほしいと言ってきたんですね。しかし、会の方針として、これは市民本位の運動にしたいので、協力はありがたいけれども、一歩引いてほしい、政党に対してそういうスタンスを貫いたんですね。その結果、政党色のない、党派色のない運動が展開できたので、多くの市民が入ってこられた。従ってそれによって、盛り上がったという面があるかと思っています。話の結論に、こういう三つパラドックスがあったと言えるかと思っています。

この徳島の運動っていうのはね、ちょっと時間の制約もあつて余り詳しく話せませんでしたけれども、本当に市民本位の運動だったんです。やりたい時に、できる時にできることをするっていうスタンスでやりましたので、いろんな人が協力しやすかったんです。それでここまで盛り上がったということが言えるかと思っています。

次にこの住民投票条例について少しお話をしようかと思いましたが、時間の関係もありますので、それは私がいろいろなものに書いておりますので見ていただくことにして、そろそろまとめに入りたいと思います。

何でこんな合理性の乏しい事業がこんなに進められてくるかっていうことですね、ちょっと考えてみたいんですが、みなさんのお手元に、資料に、まず六番の図を見ていただきたいんですけども、この六番は九二年から九八年にかけて、日本の公共事業費がどういうふうに使われてきたかということを示しているだけなんですけれども。これを見るとわかるように、毎年道路整備が一番多いんですね、だいたい三〇パーセントぐらいですかね。次は、このダムとか堰を含めた治山治水です。だいたい毎年二〇パーセント弱ですよ。一七、一八パーセントぐらい。その後、下水道とか、農業整備なんていうのが続いていますけれども、このグラフを見てはつきりすることは、毎年使い道がほとんど固定されてるってことです。毎年、事業の必要性をちゃんと真面目に考えて予算配分したら、こんなに固定化

するはずですよ。ある年は道路が多く、ある年は下水道が多い、そういうふうになるのが普通ですよ。実はそうはなってないんです。日本の公共事業費というのは、完全にいわゆる族議員といった人達が自分達の既得権としてシェアを押さえちゃってるんですね。硬直した予算配分が続く。したがって治山治水関係に毎年公共事業費の一八パーセントが、もう指定席のように来ちゃうんですね。そうすると、それ使わなきゃいけないわけです。これは建設省の人が言ってたそうですけれども、日本中でもうダムを造りすぎて、ダムを造るところがなくなっちゃった。しかし予算は毎年ついてくる。そうすると、もつともダムが必要でないところにダムを造らなければいけない。それが大きな川の河口堰だっているんです。本来、ダムというのは山の中に造るわけですよ。川の河口のところになんか造る必要はないですね、本来はね。しかしそういうところにまで造らないといけなくなっちゃった。それがこういう硬直した予算配分から生まれてるってことです。しかも一番と二番を見ていただきたいんですが、これはOECDの資料なんですけれども、GDPの中に占める、国内総生産の中に占める、この政府資本、一般政府総固定資本形成国際比較と書いてありますが、これは土地取得費を除いた公共事業費と考えていいと思います。これを見ると日本はGDPに対して約六・六パーセント、日本は地価が高いですから、地価を含めるとGDPの一〇パーセントぐらいが公共事業に使われているそうなんです。これは、他のヨーロッパ、アメリカと比べると、二倍から三倍に近いわけですね。日本は土建国家と言われていることがよくわかると思います。この一二番のグラフは、今度逆にGDPの中に占める社会保障費の割合を見たものなんですけれども、日本は一・五パーセントぐらいでしょうか。それに対してイギリスや旧西ドイツでは、七パーセント、フランスで五パーセントですからね。ちょうど上の公共事業費と逆転しているわけですね。日本がいかに土建国家であるかということが、この二つのグラフからもわかるかと思えます。こう

いう土壌が背景にあつて、こういう無駄な事業がどんどん進む、そういう構造があるということがお分かりいただけるかと思います。

最後に徳島市の住民投票ですが、振り返ってみて、私なりに感じたことを三点ほど申し上げたいんです。まず一つは、なぜ徳島でこれだけうまくいったかという点、市民が要所要所で非常に的確に動いてくれたということなんです。やはり市民の判断は合理的であるというふうに言えるかと思います。署名集めをすれば半数の人が協力してくれる。五〇パーセント条項を突きつけられれば、ちゃんと過半数の人が投票に行ってくれる。選挙の時だってね、きちんと住民投票賛成派が増えるような投票行動をしてくれたわけですね。住民投票の当日、さきほども申し上げたように雨の降る冬の寒い日でしたけれどもね、私は朝早くから近くの投票所に行つて見てたんですけれども、雨の中を三々五々みんな来てくれるんですね。これから仕事だというようなパン屋のおじさんとかね、蕎麦屋のおじさんとかね、もう仕事の服を着て、先に、仕事の前に、投票に来てくれるんですね。もくもくと集まつて自分の考えを託して書いていくわけですね。やっぱり、そういう姿を見ていて、やはり民主主義、市民を信頼するってことが、非常に重要なんじゃないかってことを、まず投票に来てくれた人の姿を見て感じましたけれども、市民というのはきちつと合理的に行動するというのが私の実感です。

もう一つは、この住民投票をやる前にですね、住民投票なんていうのは、議会制民主主義に反する、憲法の定めた間接民主主義の原則に反する、憲法違反の制度だなんていう人がいたんですけれどもね。実際、住民投票をやってみますと、間接民主制の原理に反するどころか議会を活性化する役割を果たしている、というふうに言えると思います。徳島の場合は、この住民投票の結果を受けて、まず徳島市長がそれまで可動堰推進派だったのに、自分は市民の代表だから、これからは結果に従つて反対しますって言つてね、推進派だった市長が今は反対派に変わったんです。

ね。選挙に対する市民の関心が高まって投票率も高くなって、議会の構成自体も変わったわけですね。前と比べたら、よっぽど市民のほうを向いた議会が今徳島では誕生したんですね。こういうふうに住民投票というのは、間接民主制に反するどころか、むしろ議会制度を本来の役割に戻す、それを活性化する役割があるというふうに言えるかと思えます。

それから三番目なんですけれども、住民投票は確かに政治や行政を、市民の手に取り戻すために非常に有効な制度だと言えると思います。しかし、何でもかんでも住民投票で決めるということは、これは不可能なんです。こういう大きな点についてきちんと議論を進めたうえで住民投票をやったので、非常にうまくいったわけですが、じゃあ何でも住民投票で決めようっていうことになったら、これはやっぱり大変なことになるわけです。いちいち細かい問題について、あなたの判断をきちんとしてくださいと言って、投票しろってことになったら、これやっぱりみんな音をあげちゃうと思うんですね。そうするとやはり住民投票には限界がある。やはり代表を選んで、その代表が政治や行政を行う、つまり、やはり大事なのは議会制度なんじゃないか。そういうふうには、言わざるをえないですね。議会がきちんと機能していれば、住民代表としての機能を果たしていれば、こんな住民投票なんていう、手のかかることをやらなくてすむわけですし、やはり代表がきちんと政治や行政を行うほうが、おそらくいろんなことがうまくいくだろうというのが、逆にこの住民投票の経験から、私が非常に感じたことなんです。計らずも議会制度の重要性が明らかになったと、このことも否定できないかと思えます。従いまして、また衆議院選挙が近づいているようですけれども、やっぱりわれわれの代表を選ぶっていうことは、非常に重要なことだと思います。まだ議会制度に勝る民主主義の制度っていうのが、人類の歴史の中で発明されていないわけですね。したがって代表を選ぶっていうことの重要性を再度認識する必要がある、ということも住民投票から得られた一つの大きな結論であるかと思えます。以上三点、私の

感想を申し上げたところで、本日のお話を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

質問者 この運動をやる費用っていうのは、どういう形で賄ったのか教えていただきたいです。

武田 これ、全部カンパです。一千万円集まりました。市民のカンパで、ほとんどは小口のカンパです。一つ、ある会社の社長が使ってくださいってポンと一〇〇万円くれたのが大口で、これが例外中の例外で、あとは本当に市民のカンパです。費用、七〇〇万円かかりました。三〇〇万円残りました。このお金は今、可動堰に頼らないで、吉野川の治水をどうするかという研究に使っています。

資料

地図 1

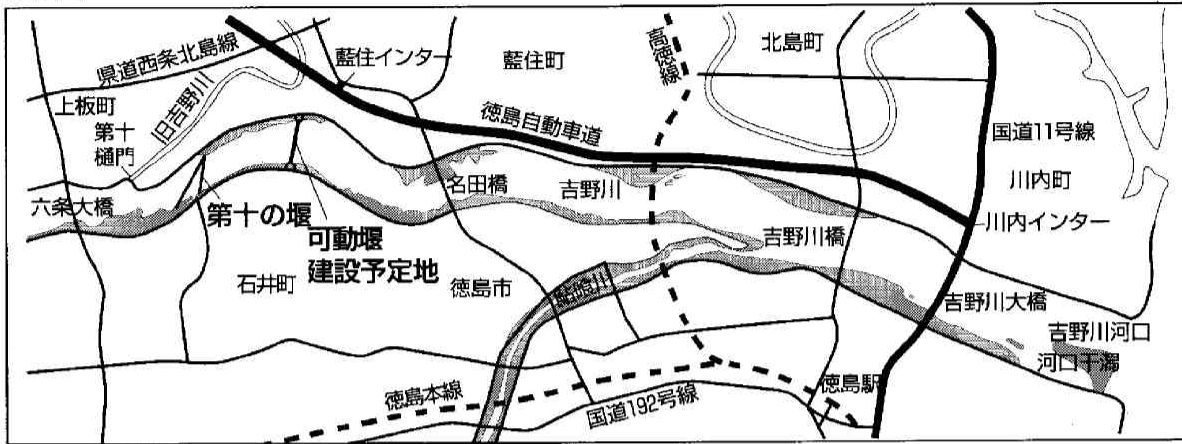


図 2 第十堰の形状

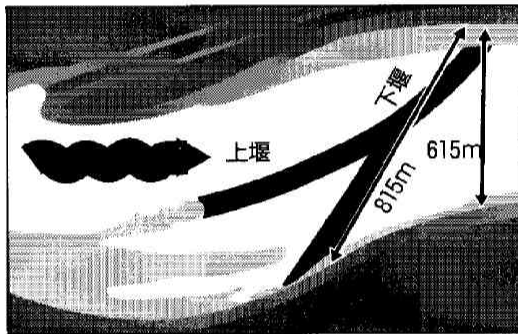


図 3 せき上げ計算水位比較

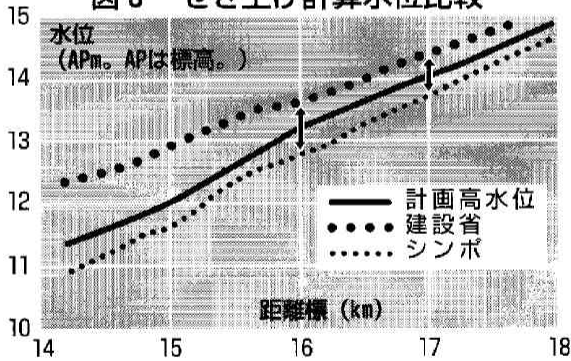


図 4 痕跡水位比較図

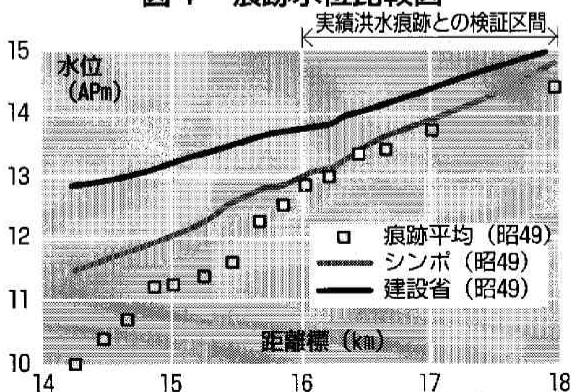


図 5 河口から16km地点の吉野川横断模式図

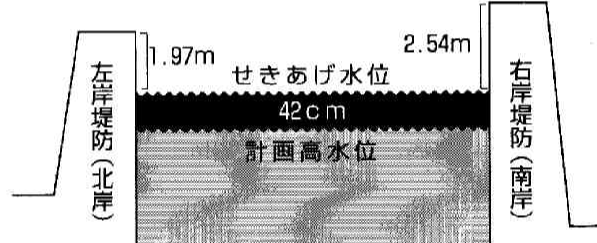


図 6

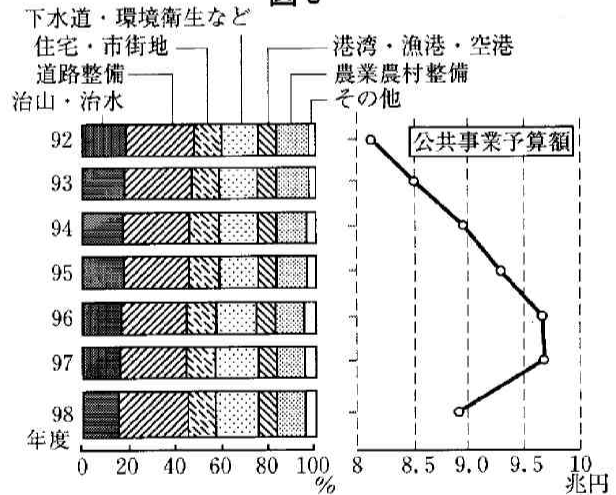


図 8 建設省とシンボの堰の形状の違い

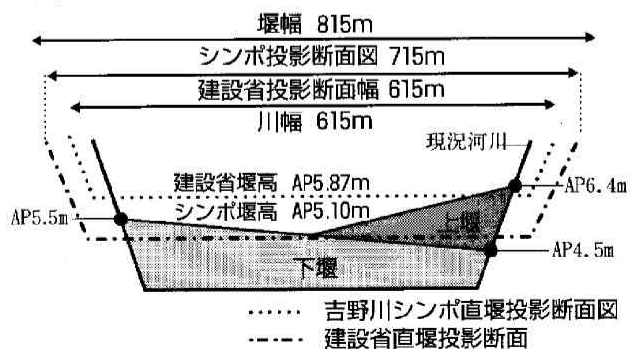


図7

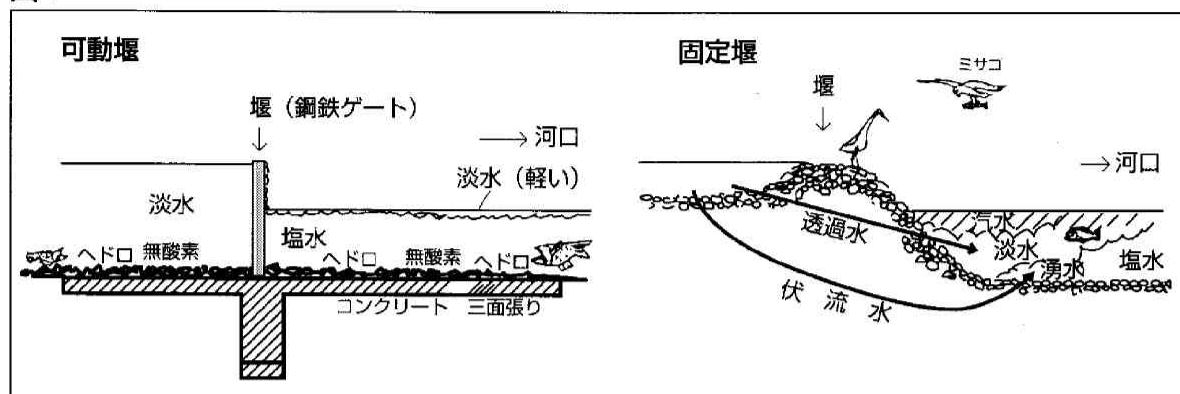
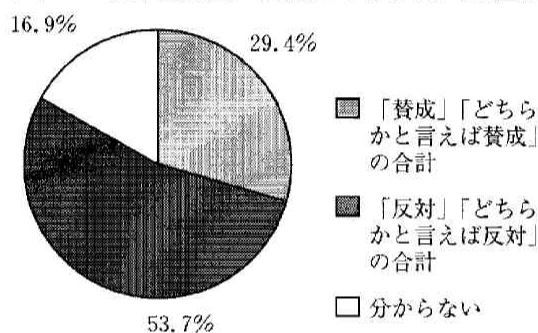


図9 可動堰計画に賛成か、反対か(県全体)



可動堰計画に賛成か、反対か(地元2市9町)

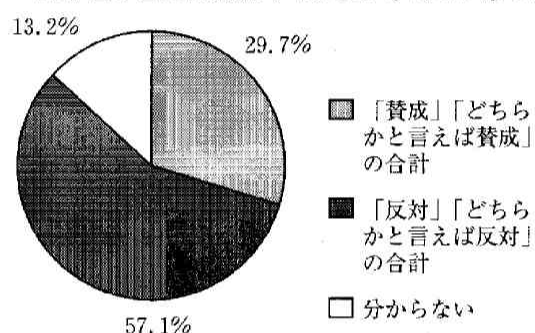
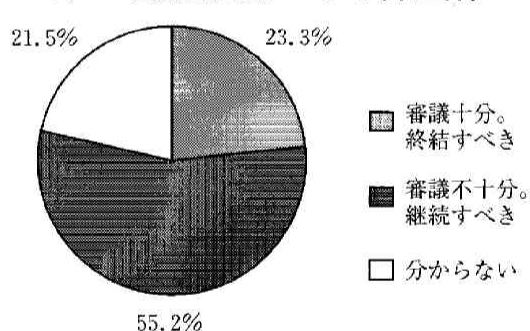


図10 審議委員会について(県全体)



審議委員会について(地元2市9町)

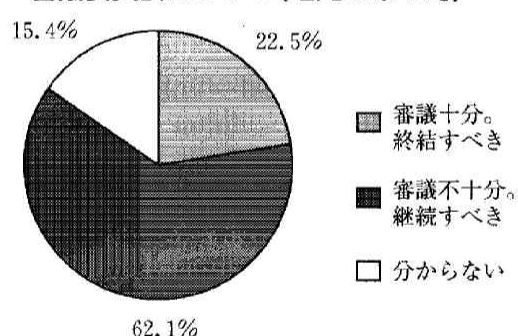


図11 GDPに占める一般政府総固定資本形成の国際比較(1996年度)

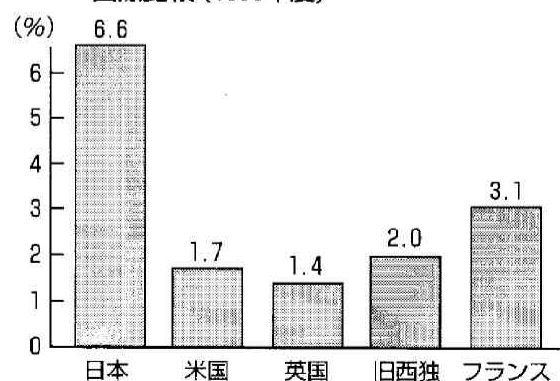


図12 政府最終消費支出の国際比較

